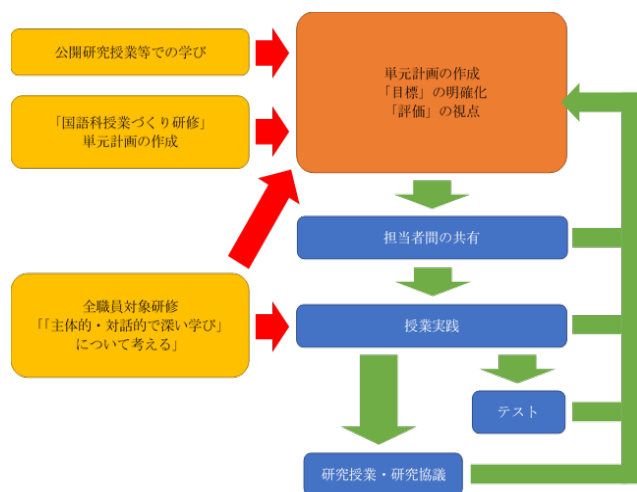


## 資質能力の育成を目指した授業づくりに向けて

### — 高等学校国語科における実践 —

神奈川県立総合教育センター企画広報課  
本澤 勝也

次期学習指導要領の告示を目前にした現在、高等学校は大きな変革の中にある。今後は「育成すべき資質・能力」をキーワードに、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善だけではなく、観点別学習評価の一層の充実も求められるだろう。その中で「言葉」そのものを学習対象とする国語科の果たす役割は大きいと考えられる。にも関わらず、依然講義調の伝達型授業であるとの指摘もされている。そこで、本研究では主に国語科を対象に、学習指導要領の指導事項を基に「目標」を明確にし、評価規準を作成した上で、授業を行い、「目標」と「指導」と「評価」の一体化を目指した。



研究全体図

実践を通して、多くの先生がテキストの内容を理解させることを重視し、そのためにテキスト外の、学習者にとって身近な具体例を用いて、教師が説明するという授業を展開していることがわかった。つまり、「このテキストでどのような資質・能力を育成したいのか」よりも、「テキストの内容をどうやって理解させられるか」という授業観が垣間見られる。また、そのために「どうい話をすれば分かりやすいか」「どうやって学習者に

話を聞かせるか」ということが意識の中心にあることが分かる。「学習者がどうやってテキストを自力で読み解くことができるか」を大きな目標にしながらも、実際の授業では教師主体の説明に終始することも少なくない。グループワークやペアワークによる生徒主体の学習活動を展開しようとする場合にも、まずは教師の説明によってテキストの内容を理解させた上で行おうとしている。その活動を活性化するためには、活動の時間を確保すること、指示を明確に出すこと、そして、その前にテキストの内容を教師がしっかり理解させることが重要だと考えていることが、研究協議の発言からも伺える。

また、授業者の授業を見る視点は、説明・指示・板書・学習者への対応など「教師の立ち居振る舞い」、それらに対する学習者の反応や授業への参加状況などの「集団の把握」に集中している。学習者1人1人が「目標」を達成しているかどうかといった「個の把握」がなければ、「目標」に知って授業を語ることは難しいだろう。こうした教師の授業を見る視点が、自身の授業観から授業者の授業を語る傾向にも通じるのではないだろうか。

以上のように、取組自体には成果らしい成果は見られなかったものの、追加調査によって次年度以降の授業改善に向けた具体的な課題を抽出することもできた。その課題とは、①教師のネガティブな生徒観が学習意欲の喚起を目指した説明中心の授業スタイルを選択させていること、②学習指導要領や中央教育審議会等の答申を読む機会が少ないため、「育成すべき資質・能力」や「指導と評価の一体化」といった、授業改善に関する重要な概念をあまり理解していないこと、③定期試験のあり方や学習者の見取りなど、「評価」に対する意識が希薄であること、④相互に授業を見たり、ワークシート等を共有したりすることに抵抗感が強いこと、の4点に集約できる。